

1. 研究背景と目的

食品ロスは世界で年間 13 億トン排出されており、SDGs のターゲット 12.3 において半減目標が掲げられている [1]。日本でも家庭系食品ロスの半減を目指しており、削減目標達成に向けて家庭系食品ロス削減行動の要因を明らかにし、その要因に働きかける施策が必要である。

野々村[2]は食品ロスの発生要因として、消費者の食材を食べ切る意識、管理する意識等、意識の重要性を述べている。また大学生の食品ロスの要因や実態について明らかにした研究もある[3]が、これまで新たな食生活が形成される過程でどのように食品ロスの少ない食生活が形成されるかについて明らかにした研究は見当たらない。

そこで本研究では、大学生が一人暮らしを始め、新たに食生活を形成する過程とそれに伴う食品ロスの発生状況を分析し、食品ロスの少ない食生活を形成するプロセスと要因を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法と分析方法

2.1 インタビュー調査と分析方法の概要

京都府立大学の一人暮らしの学生を対象にMicrosoft Teamsを用いたオンライン通話によるインタビュー調査を行った(表1)。主に一人暮らし開始以降の食生活形成のプロセスおよび要因と食品ロス削減行動について尋ねた。

インタビューを基に食生活形成プロセス、食品ロスの発生プロセスを順次時系列でまとめ、これをグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、GTA)を参考に分析し、食品ロス発生要因の仮説モデルを作成した。

表1 調査概要

事例	調査年月	文理	性別	回生	一人暮らし歴
A	2022年9月	理系	女	3	2年5か月(大学入学時から)
B	2022年11月	文系	男	3	2年7か月(大学入学時から)
C	2022年12月	理系	女	2	1年2か月(1回生後期中途から)
D	2022年12月	文系	男	1	8か月(大学入学時から)
E	2022年12月	理系	男	2	1年8か月(大学入学時から)
F	2022年12月	理系	男	2	1年8か月(大学入学時から)

2.2 本研究におけるGTAの適用方法

GTA とは、データに根差した理論を産出する社会科学の方法論で、インタビュー等によって得たデータの全てを客観的に細かく分断し具体的な値を与え、それらの相関関係を用いて現象を表現する[4]。サンプリングから分析方法までGTAで提示された手法があるが、ここでは主にプロパティ(分析者の視点)とディメンション(プロパティを通してデータを見たときの情報)を活用した。

3. 食品ロス発生要因分析

ここでは紙面の関係でAの事例の一部についてのみイ

ンタビュー内容とデータ分析、モデル構築の例を示す。

3.1 食品ロス発生プロセス

経験したことのある食品ロスはどういったものがあるか尋ねたところ、主に調理余りからの廃棄、保存したのちの経過による廃棄、貰い物を廃棄の3点であるという回答を得た。ここでは紙面の関係で調理余りについてのみ一連の分析の流れについて説明する。調理余りが発生してしまった経緯について尋ねると、買い物に不慣れで自身の消費量もわからず、買いすぎ、調理余りが発生する。結果、腐らせて廃棄してしまうことがあった、と答えた。しかし、買い物に慣れることで廃棄は少なくなったということだった。

3.2 食品ロス発生要因の変化に関するGTA的分析

インタビューから、Aの食品ロスに関係する食生活・行動に変化があった時期として、1.一人暮らし開始直後、2.アルバイトを始める、3.買い物経験から勿体ない意識を持つ、4.現在、が抽出された(表2)。2,3は先述した「保存したのちの経過による廃棄、貰い物を廃棄」において変化が見られた時期である。アルバイトを始めることで金銭的意識を持つようになり、買い物経験から勿体ない意識を持つようになり調理方針について考えるようになった。「自炊の買いものに慣れていなかった。買ってどのくらい作り、食べるのかわからなかった。」ということから買い物に不慣れなこと、またその消費量がわからなかったことが分かり、これが食品ロスに繋がるのがプロセスからわかる。また「自炊を続け経験する中で慣れていき、買いすぎてしまうことは減り、自分が食べられる量がわかるようになった。」ということから慣れることでよい方向に変化したことがわかる。そこで食品ロスの発生に関係するプロパティとして、買い物行動に対しては「買い物感覚」、消費量に対しては「消費感覚」を抽出した。

表2 調理余りによる食品ロス発生におけるGTA的分析

プロパティ	ディメンションとその変化			
	一人暮らし開始直後	アルバイトを始める	買い物経験から勿体ない意識を持つ	現在
買い物感覚	ない	慣れ始める	慣れる	慣れた
消費感覚	ない	慣れ始める	慣れる	慣れた
食品ロス例	食品ロス排出量とその変化			
調理余り	あり	減った	ほぼない	ほぼない



図1 食品ロス発生要因の仮説の例

4. 食品ロス発生要因の統合モデルの構築

この図より最も多くの人の食品廃棄に影響を与えていた要因は「外食機会」と「食品管理能力」だと考えられた。外食機会の増加は食材消費機会の減少に直接的に影響し食材放置に繋がる。外食機会の増加に関連する要因として調理環境の悪さによる自炊意欲の低下（B「調理場がほぼなく料理しにくい」など）、私生活の忙しさ（BD）や友人との交流（BC）等が挙げられた。

次に、食品管理能力(ABCE)について検討する。食品管理能力が弱いと、食品を保存していることを忘れ、食品廃棄に繋がる(ABE「冷蔵庫に残っていたのを忘れていた」C「冷蔵庫にあったにも関わらず新たに買ってしまった」)。このことはそれまで冷蔵庫の食材を管理することを経験

一方で食品廃棄の改善には一人暮らしに慣れる中で養われる要因の多く(消費量感覚 (ABE)、調理経験 (BE)、適切な保存能力 (ABC) 等) が影響を与えている。これらは一人暮らしをする中で獲得する、ある種、受動的な要因である。それに対して食品廃棄の改善に能動的に影響を与えていた要因は「調理方針」であった。ADE において、それぞれ経緯は異なるが能動的に行動し食品ロスが減った際に影響を与えた。これは「金銭的意識」や「食材消費意識」を要因として自身の食生活について改めて考えたからである。このことから自身の食生活について見直すことが食品ロスを減らすのに有効であると考えられる。

本研究では食品ロスの発生要因について食生活の形成プロセスから分析を行った。その結果、食品ロス発生要因モデルを構築した。また分析からは受動的に食生活を形成するだけでは食品ロスの少ない食生活にはならず、生活パターンの変化に伴い能動的に行動する必要があることが示唆された。具体的には調理方針を検討することが有効と考えられた。

[1] FAO (2011) 『Global Food Losses and Food Waste』／[2] 野々村真希 (2014) 「家庭において食品がロスに至った原因」, 『フードシステム研究』, 20 巻 4 号, pp.361-371.／[3] 太田はるか (2019) 「大学生の食行動に関する質的研究」, 『同志社政策科学研究』, 21 巻 1 号, pp.137-149. [4] 戈木クレイグヒル滋子 (2005) 『質的研究方法ゼミナール』, 医学書院

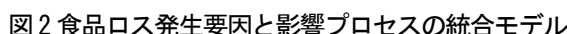


図2 食品ロス発生要因と影響プロセスの統合モデル